

報告

外国語教育におけるソーシャルネットワーキングアプローチ

横溝 紳一郎*

＜要 旨＞

目標言語が何であれ、「何をめざして教えているのか」という問いに対する回答を、外国語教師は持っていなければならない。本研究は、「外国語教育の最終目的は、人間形成である」という観点から、當作靖彦氏が提唱する「ソーシャルネットワーキングアプローチ（以下SNA）」に関する探究・検討を行った。

その結果、(1) SNA が21世紀に求められるキー・コンピテンシーの獲得をめざしていること、(2) SNAでは「つながり」が最重視されていること、(3) SNAは「メソッド」ではなく、具体的実践方法の開発が現場レベルで求められていること、(4) SNAがバックワード・デザインによって成立していること、が明らかになった。今後、SNAの枠組みで数多くの実践が積み重ねられ、成果と課題についての情報が広く共有されることによって、SNAはさらに発展していくと考えられる。

キーワード：キー・コンピテンシー、つながり、バックワード・デザイン

1. はじめに

目標言語が何であれ、「何をめざして教えているのか」という問いに対する回答を、外国語教師は持っていなければならない。中嶋（2011：234-235）は、この回答を「理念」と位置づけ、以下のように述べている。

大志あるところに、「理念」が生まれるものである。理念というものはたとえ何があろうともぶれない。たとえ、誰から批判されようが、根っここの微動だにしないものである。地上の葉や茎や幹が大きな風に吹き飛ばされ、山火事で燃え尽きたとしても、根っこが残っている限り、やがて芽を出し、茎が伸びていく。大切なのは根である。…

根の部分は見えない。見えないからこそ、人は「どっしりとした根」の存在、つまりはここで言う「理念」に心動かされるのである。

本稿の筆者も、「自分の教育理念は何か」をずっと自問自答し続けているのであるが、この最近「外国語教育の最終目的は、人間形成ではないか」と考えるようになってきた。三浦（2014：iii）の以下の文言は、そんな筆者の考えを代弁しているように思える。

外国語教育は、人との結びつきの教育のほずです。言語コミュニケーションによって、生徒一人一人が、かけがえのない自分と他者に気づき、見知らぬ同士の壁を友好へと変える教育です。人と対立した時でも、こちらの都合を言葉にして相手に伝え、相手に冷静に耳を傾け、話し合ってお互いが納得できる解決を導き出す教育。冷え切った人間関係にあっても、自分のイニシアティブでそれを暖かい関係に変え、世界の暴力の連鎖を断ち切り、協働と連帯を草の根から築いてゆく教育です。外国語教育はそういう豊かな社会性の育成につながるものでなければなりません。

本稿は、人間形成を最終目的とする外国語教育の例として、ソーシャルネットワーキングアプローチ（以下SNA）を探究し、検討を加えるものである。

2. SNA とは何か

2.1 SNA が生まれた社会的背景

SNAは、グローバル化が急スピードで進行する21世紀で、社会が要求する資質・能力を外国語教育を通

* 西南女学院大学人文学部英語学科

して育成しようとするアプローチである。では、21世紀の社会では、どんな資質・能力が求められるのだろうか。育成すべき資質・能力の明確化については、国内外で様々な取り組みがなされたのであるが、ここではOECD（経済協力開発機構）による「キー・コンピテンシー（Key Competencies）」を紹介する。

OECDが実施している国際学習到達度調査（PISA）の基本概念は、『コンピテンシーの定義と選択：その理論的・概念的基礎』（Definition and Selection of Competencies：Theoretical and Conceptual Foundations－DeSeCo）に基づいている（田中2016：26-27）。「コンピテンシー」とは「断片化された知識や技能ではなく、その人の全体的な資質や能力を示す（前田2017：42）」用語である。日常生活のあらゆる場面で必要とされるコンピテンシーの中から、「人生の成功と正常に機能する社会（持続可能な発展：Sustainable Development）のために、どのような能力が必要になるのか」という観点で、OECDによって定められたのが、キー・コンピテンシーである。キー・コンピテンシーは、大きく3つに分けられる。

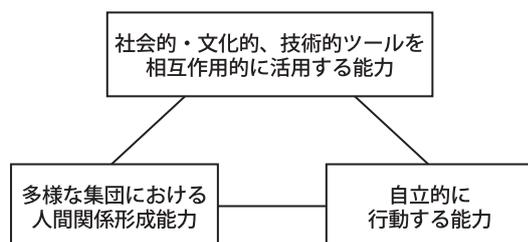


図1 キー・コンピテンシー

3つのキー・コンピテンシーの構成要素は、以下の通りである。

1. 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力
 - a. 言語、シンボル、テキストを活用する能力
 - b. 知識や情報を活用する能力
 - c. テクノロジーを活用する能力
2. 多様な集団における人間関係形成能力
 - a. 他人と円滑に人間関係を構築する能力
 - b. 協調する能力
 - c. 利害の対立を御し、解決する能力
3. 自立的に行動する能力
 - a. 大局的に行動する能力
 - b. 人生設計や個人の計画を作り実行する能力
 - c. 権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する

能力

2.2 SNAの理論的基盤としての「外国語学習のめやす」

上掲のような資質・能力の獲得を、外国語教育を通してめざすのがSNAである。SNAは、国際文化フォーラムによる『外国語学習のめやす（以下めやす）』（2012）に示された考えを発展拡大したものである（當作2017：6）ので、SNAの探究には、『めやす』の理解が必要不可欠である。以下、『めやす』の教育理念・教育目標・学習目標について述べていく。

2.2.1『めやす』の教育理念

『めやす』は教育理念として「他者の発見、自己の発見、つながりの実現」を掲げている。このうち、「他者の発見」と「自己の発見」に関しては、言語や文化を学習するだけにとどまらず、「異文化の相手との言語コミュニケーションを通して（1）他者を理解し、（2）そのプロセスによって自己の再認識をすることが言語学習の目的（山崎2019：9）」とされている点が特徴的である。「つながりの実現」に関しては、以下のような説明がなされている（国際文化フォーラム2012：17）。

「めやす」は、自他の理解を深めながら、共に生き、関係性を構築して、協働社会を創ることをめざします。他者の発見と自己の再発見の積み重ねは、他者と向きあい、自己を見つめなおしたうえで自己を表現し他者のことばに耳を傾ける「伝えあいによる共感」を生みだします。この伝えあいによる共感、さらに相互の「わかりあい」と新たな価値の「わかちあい」に発展し、ひいては真の意味でのつながりを実現させるのです。外国語教育を通じて学習者に豊かな学びの場を提供し、人びとが共に生きていける未来社会の担い手を育むことをめざします。

2.2.2『めやす』の教育目標

『めやす』が掲げる教育目標は、「ことばと文化を学ぶことを通して、学習者の人間的成長を促し、21世紀に生きる力を育てる（山崎2019：10）」ことである。21世紀に求められる資質として、他者と向き合う時に必要な「寛容性・共感性・他者への尊重の念」、自己と向き合う時に必要な「内省力・自尊感情・自主性・自律性」、自他関係性の構築と社会づくりに必要な「創造性・柔軟性・責任感」を、『めやす』は教育目標として

挙げている。

2. 2. 3 『めやす』の学習目標

『めやす』が掲げる学習目標は「総合的コミュニケーション能力の獲得」である。総合的コミュニケーション能力の具体例は「3領域×3能力+3連携」の表で示されている。

		3つの能力		
		わかる	できる	つながる
3つの領域	言語	A. 自他の言語がわかる	B. 学習対象言語を運用できる	C. 学習対象言語を使って他者とつながる
	文化	D. 自他の文化がわかる	E. 多様な文化を運用できる	F. 多様な文化背景を持つ人とつながる
	グローバル社会	G. グローバル社会の特徴や課題がわかる	H. 21世紀型スキルを運用できる	I. グローバル社会とつながる
3つの連携		連携1: 関心・意欲・態度／学習スタイルとつながる		
		連携2: 既習内容・経験／他教科の内容とつながる		
		連携3: 教室の外の人・モノ・情報とつながる		

図2 3領域×3能力+3連携

1. SNAの特徴

2. 3. 1 外国語教授法としての位置づけ

村上(2018:195)は、文法訳読法、オーディオ・リンガル・メソッド(ALM)、コミュニカティブ・アプローチ(CA)で「できるようになること」を、以下のように説明している。

文法訳読法=わかる

ALM=わかる, 言える

CA=わかる, 言える, 話せる

文法訳読式は、「外国語を読んで理解できること」の実現をめざすものであった。ALMの時代になると「聞いて理解することに加えて、口頭で言える」ことが達成目標となり、反復練習や代入練習などの機械的ドリル活動が行われるようになった。しかしながら、「ALMでは、文型を使って文を組み立てることはできるようになっても、その文型を場面に応じた形で適切に使用できない」という批判がなされ、CAの時代へと移行していった。CAでは、場面を設定した上でのペア・ワークやロールプレイが多用され、「話せる」こと、すなわち「口から発した言葉が、相手に届き、適切に理解してもらう」ことの実現がめざされたのである。SNAで掲げられている学習目標は、図2の3つの能

力、すなわち「わかる」「できる」「つながる」である。上掲の村上は、SNAの「できる」は、CAの「言える」「話せる」の二つが統合されたものであり、その上でさらに「つながる」が求められていると主張している。この主張に従うと、以下ようになる。

文法訳読法=わかる

ALM=わかる, 言える

CA=わかる, 言える, 話せる

SNA=わかる, 言える, 話せる, つながる

このような形で、外国語教授法の変遷をみていると、SNAにおける「つながり」の重要性が明らかになる。以下、SNAにおける「つながり」に焦点を当て、分析を加えていく。

2. 3. 2 SNAの「つながり」

前出の図2では、(1)「3つの領域におけるつながり」と(2)「3つの連携におけるつながり」が挙げられている。以下、それぞれのつながりについて述べていく。

2. 3. 2. 1 言語領域における「つながり」

学習対象言語を使って他者とつながることであり、具体的には、「学習対象言語や母語を使って、積極的かつ主体的に他者と対話して、相互作用しながら共に関係を作り上げていく」ことを指す。『めやす』では、以下のような説明がなされている(国際文化フォーラム2012:23)。

他者と交流し、積極的に対話をして関係を作ることが「つながる」の目標です。対話は基本的には異なる考えや意見をもつ者同士で、意見交換をして双方が合意できる考え、価値、気持ちを探るものです。その過程は容易ではありませんが、そのなかで他者理解、自己の発見が起り、相互理解が深まり、人間同士の「つながり」を築いていきます。その「つながり」は一瞬のこともあれば、一生続くものもあります。(中略)この「つながり」は同じ外国語を学ぶクラスメイトから、教室外でその外国語を学んでいる仲間、その言語を話す人たちとの「つながり」へと広がっていきます。

2. 3. 2. 2 文化領域における「つながり」

多様な文化背景をもつ人とつながることであり、具体的には「多様な文化背景をもつ人びとと主体的かつ

積極的に関わり、相互に作用しながら、軋轢や摩擦を超えてつきあう」ことを指す。以下は、『めやす』での説明である（国際文化フォーラム 2012:25）。

文化を捉える複眼的な視点をもって、同世代の母語話者などとの直接交流やウェブサイトを活用した間接交流に積極的に参加し、尊重の念をもって相手の背景にある文化に向きあい、みずからを振りかえりながら、関係性を構築していくことをめざします。その過程で、異なる価値観に葛藤したり、自分自身が相手の影響を受けて変容したり、さまざまな考え方などを調整したり、新たな共有価値を創造したりするなど、相互作用のなかで、多様な他者とつきあっていく力を身につけることをめざします。

2.3.2.3 グローバル社会領域における「つながり」

グローバル社会とつながることであり、具体的には「人・モノ・情報にアクセスして、自分とつながりのあるグローバル社会のネットワークに関わり、ネットワーク全体の目標達成やグローバル社会づくりのために、自分の能力、知識、時間などを提供したり、メンバーと助けあい協力して行動する」ことを指す。『めやす』では、以下のような説明がなされている（国際文化フォーラム 2012:29）。

（学習対象言語を）学ぶことを通して、グローバル社会がそれぞれ自分とつながっていることを実感し、それに関わることをめざします。まずは地域社会とのつながりを考えたり、信頼できるウェブサイトで、世界の同世代と母語や外国語で情報交流や相互理解のためのやりとりをし、ネットワークを構築することも可能でしょう。人・モノ・情報に積極的にアクセスして、グローバル社会のネットワークに参入し、ネットワーク全体の目標達成やグローバル社会づくりのために、自分の能力、知識、時間などを提供したり、メンバーと助けあい協力して行動したりすることが期待されます。

2.3.2.4 連携1における「つながり」

学習者の関心・意欲・態度、学習スタイルとの連携である。『めやす』では、以下のような説明がなされている（国際文化フォーラム 2012:21）。

3つの領域、3つの能力を強化するものとして、3つの連携も目標としています。まずは、学習者の関心と意欲を引き出すことです。また学習を継続する態度形成を図る必要があります。学習者が学習する状況にあり、学ぶ意欲や態度が見られることが前提になります。クラスによっては、教師はここで苦勞することもあるでしょう。学習者は1人ひとり異なっていて多様です。例えば、書いて覚えることが得意な学習者もいれば、聞いて覚えることが得意な学習者もいるように、学習スタイルが異なるのです。それぞれに合った授業をすることも容易ではありません。しかし、学習者の関心・意欲・態度、学習スタイルを常に考慮する必要があります。すなわち、学習者が主体的、能動的に学習を行ない、自分の関心・意欲・態度、学習スタイルを踏まえて学習できるように配慮することが教師の役目です。学習者が学習ストラテジーを身につけ、生涯にわたって自律的に学習を継続できるように、その土台を作ることをめざします。

2.3.2.5 連携2における「つながり」

他教科の学習内容や既習内容との連携である。以下は、『めやす』での説明である（国際文化フォーラム 2012:21）。

学習者がすでに学んだことや、他教科で学習している内容を踏まえたり、連携させたりすると、さらに豊かな学習内容をもった活動ができます。内容重視の立場から、学習者にとって意味のある内容のなかに、学習したいと思う語彙や表現などの言語材料を自然に導入できれば一石二鳥です。内容重視の学習は、近年の学習理論や外国語教育の実践結果からも、効果的であるとわかっています。また学習対象言語を使って第一次資料を調べたり、学習対象言語の話者から文化や社会に関する情報を得たりすることによって、逆に外国語科目が他教科の内容を補強することになります。外国語教育が全教科のなかで重要な役割を果たすことができると考えています。

2.3.2.6 連携3における「つながり」

教室外の人・モノ・情報との連携である。『めやす』では、以下のような説明がなされている（国際文化フォーラム 2012:21）。

教室で行なうコミュニケーション活動は、学習者にとって意味のある、現実社会に近い場面や状況のなかで行なうことが求められます。なぜならば言語の重要な機能は、コミュニケーションを通じて社会活動をすることであり、よって現実社会とのつながりのなかで学習することが一番効果的だからです。そのため、教室が実社会とつながるように、学習対象言語の話者を教室に連れてきたり、地域や海外から実物を持ってきたり、インターネットや新聞・雑誌の情報にアクセスしたりすることが推奨されます。教室での学習を教室外とつなげることによって、学習者は地域社会やグローバル社会に実際に触れ、それに参加することができます。また学んだ表現が通じ、あいさつが交わされたりすると、感動が生まれ、生の文化体験となつて、学習者の関心を喚起することにもつながります。事情が許せば、積極的に地域社会や学習している言語が使われる国や地域に出かけていって、母語話者を相手に学んだ言語を使うこともできます。現実社会に通用する総合的コミュニケーション能力を育てるためには、教室のなかに閉じこもることなく、必然的にコミュニケーションが求められる環境のなかで、本物のコミュニケーションをするほうが、学習の動機づけも高まります。

2.3.2.7 各「つながり」の位置づけ

上掲の(1)「3つの領域におけるつながり」は能力目標であり、(2)「3つの連携におけるつながり」は、学習活動の中でのつながりを実現させるための行動目標である(當作2017:10)。これらのつながりの中で、SNA提唱者である當作靖彦氏が最重要視しているのが、「グローバル領域でのつながり」である。

この領域の中で、筆者は「グローバル社会領域」の「つながり」、すなわち、言語を使って、コミュニティ活動に効果的に参画し、社会を変え、社会に貢献する能力を身に付けることが言語教育の究極の目標であると考えます。SNAのめざす新しい言語教育とは、「つながりを作る言語教育」、「問題解決の言語教育」、「社会貢献の言語教育」なのである。(當作2017:10)

2.3.3 SNAの「つながり」の再考

ここまで、SNAにおける「つながり」をキーワードとして、『めやす』や當作(2013, 2017)に記された文言を紹介してきた。その中で、SNAにおける「つながり」が、本稿の筆者が想定していた「つながり」よりも広範囲に及ぶのではないかという思いが芽生え始めた。この疑問に対する回答の一つが、當作(2013:104-105)に示されている。

ソーシャルネットワーキングアプローチではただ単に外国人と話したり、テキストチャットをしたりすることを「つながる」とは考えません。その情報伝達、情報交換によりコミュニティを作ったり、一緒に広い意味での社会活動をしてはじめて「言語領域」の「つながる」目標が達成されたと考えます。

外国語というと、どうしても遠くにいる、あるいは別の国にいる人と「つながる」ことを考えがちですが、身近にいる人たちと「つながり」、その「つながり」をさらに広げていく態度が重要です。背伸びをしないで、自分のごく近いところから人に影響を与えていくのです。

つまり、SNAが強調しているのは「外国語学習を通して、人と人がつながること」なのである。そのつながり方には、「学習対象言語母語話者との直接対話」だけでなく、「学習対象言語学習を通して得た情報を、他者と共有すること」や「学習対象学習者同士の母語での助け合い」等、様々な形で人と人とのつながりが考えられる。しかも、そのつながりは「人と人のつながり」にとどまらず、「自分自身とのつながり」や「これまで学んできたこととのつながり」や「教室内外の学習リソースとのつながり」まで広がっているのである。

21世紀における外国語教育で「つながり」を重視しなければならない理由について、當作(2013:111-112)は以下のように述べている。

つまり人間は「つながる」ことを求める「社会的動物」なのです。人間にとってのコミュニケーションの本質、究極の目的は「つながる」ことにあると言えます。

そう考えると、言語は社会活動の一部であり、言語だけを切り取っても意味はありません。従来はその視点がありませんでした。社会活動の中か

ら言語だけをとり出して純粋に教えようとしてきたことに、大きな問題があったのです。

また、言語をコミュニケーションの「手段」と考えていたCAにも不足していた部分がありました。言語が「つながる」ためにあるのなら、コミュニケーションの意味は、情報伝達、情報獲得よりも上位にあるはずで、「つながる」のは個々の人間であり、コミュニティと人間であり、コミュニティとコミュニティでもあるはずで、それらの「つながり」には、社会そのものをつくる働きもあるのです。

それでは、国語であれ、外国語であれ、コミュニケーションをこのようなものとして教えているのでしょうか。それをめざすのがソーシャルネットワーキングアプローチ(SNA)のテーマです。

さらに當作(2013:113-115)は、外国語教育の中のつながりの重要性について、以下のように述べている。

言語の究極的目的が社会活動を行うことであるならば、その社会活動を円滑に行えるようにする能力も言語のクラスで育成すべきです。「グローバル社会領域」の「わかる」レベルは、先に述べた現在のグローバル社会で起こっている問題を理解することです。また、21世紀を生きるために自分はどのような知識、能力、資質が必要であるかを意識的に考え、自分で目標を立てるようにすることです。

企業経営者に21世紀の社会を生き抜くために一番必要な能力は何かを尋ねると必ずトップに「協働力」をあげることはすでに述べました。情報があふれた社会、つながりが重要な役割を果たす社会では、人々と一緒にものを仕上げたり、コミュニティを作っていくに必須の能力です。グローバル社会では、これを自分の言語、文化とは異なる人々で行うこととなりますが、外国語のクラスはこのような能力を発展させる最適の場と言えます。

旧約聖書の創世記に出てくるバベルの塔の逸話では、人々が塔を建てているのを見た神がそれを阻止するために、もともと同じ言語を話していたのに、異なる言葉を話させるようにしたとあります。人々はそのために混乱して、各地に分かれていく、のです。

異なる言語を持つ人々が共生できる世界を作り、みんなが繁栄を享受できるようにするのが、コミュニケーションの真の意味です。またそれを実行できる人間を作るために最適なのが外国語教育です。SNAはそのような目標を達成する社会全体の枠組みへのアプローチを提示するものです。

言語は言語単体で存在するのではなく、いろいろなものと結びついて言語として成り立っています。言語を単独で教えることには問題があり、また認識が不足してしまう懸念があります。それなら言語本来の姿に立ち返って、社会活動の中で使っていこう、学んでいこうというのが新しい考え方、ソーシャルネットワーキングアプローチ(SNA)です。

外国語のクラスの最大の利点は、フランス語のクラスなら、フランス語を話している人、その人たちがどう思うかを持ってどういうふうに住んでいるかがわかることです。他人のことがわかれば、自分と比べることで自分がわかる。自分のことを知るのには、本当は難しいことですが、他人を知ることで、はじめて自分を知る機会ができるわけです。

他人がわかって自分がわかったら、そのあいだでつながりを持とうとします。その先には、人間同士で関わってコミュニティを作ったり、世の中の動きに一石を投じようとする行動が現れてくるでしょう。

日本が今後グローバル社会で取り残されないためには、外国語教育の果たす役割がとても大きいのです。

當作靖彦氏によるこれらの文言を読んでいると、SNAが、単なる「外国語の教え方」とどまるものではなく、「外国語教育を通じて、21世紀に役立つ人材を育成しようとする思想」であることが見えてくる。SNAに「アプローチ」という用語を入れた意味がここにある。小林(2019:154)によると、外国語教授法には、以下の三つの側面が存在している。

- ① アプローチ：特定の言語観や言語学習観に基づく教授法理論
- ② メソッド：ある教授法理論に基づく指導法
- ③ テクニック：具体的な教室活動の手順や技術

SNAは「アプローチ」であるが故に、その理想の実現のためであれば、様々なメソッドやテクニックの活用が可能となる。この点に関して、當作（2017：11）は、以下のように述べている。

SNAはメソッドではない。このように教えなくてはいけないという指定は全くないし、実証的理論ではなく、存在論的理論に基づくSNAはその性格上、SNAの総合的コミュニケーション能力を獲得するために、必ずしなければならない方法を指定することは無理である。3×3+3を達成するためには何をしてもよいという立場を取る。それぞれの教師が与えられた状況で3×3+3を達成するための最適な環境と条件を作ることが要求される。従って、これまで以上に教師の教育のデザイン力が問われることになる。文法・語彙の教育（わかる）、それを使用しての情報交換、情報獲得（できる）、さらには、言語を使ってコミュニティに参画し、コミュニティを作る、変える（つながる）能力が調和よく達成されるための最適条件を、それぞれ置かれた環境で作ることになる。

SNAがアプローチであるが故に、その実践方法についてはかなり抽象的な表現が使用されている。しかし、現場の外国語教師が求めるのは、より具体的な実践方法の提示である。どのようなメソッドやテクニックを活用すれば、SNAがめざす「つながり」を実現することができるのか、について以下に述べる。

2.3.4 SNAでどのように教えるのか

SNAには「目標を達成できるなら何をしてもいい」という前提があり、「(3×3+3が効果的に達成できる)学習者中心、学習者主体の教育方法を使うのが望ましい」という考えもある。その具体的な教授法として、當作（2017：12）は、以下を挙げている。

Project-Based Learning (PBL)
 Problem-Solving Learning (PSL)
 Passion-Based Learning
 Thematic Approach
 Inquiry-Based Learning
 Content-Based Instruction (CBI)
 Content and Language Integrated Learning (CLIL)
 Process-Based Learning

Case-Based Learning
 Literacy-Based Instruction
 ゲーミフィケーション
 反転授業
 ハイブリッド型学習
 ブレンド型学習
 区別化授業
 メーカー教育
 Disruptive Education
 ジーニアス・アワーズ

各教師には、自分の置かれた教育実践の場で、上掲の教授法等を取捨選択し、3×3+3を達成するための最適な環境と条件を作ることが求められている。それ故、SNAでは、教師の高レベルの教育デザイン力と、その実現に向けた教師養成・研修が必要不可欠なのである。この点に関して、當作（2017：12-13）は、以下のように述べている。

「目標を達成できるなら何をしてもいい」という考えは認知論的第二言語習得理論を唱える研究者から批判されるが、社会的、文化的第二言語習得理論に基づくSNAでは、何ら問題ないことと考える。そのかわり、教師は学習活動をデザインする能力、学習環境をデザインする能力、カリキュラムをデザインする能力をしっかりと身に付けておくことが大切で、その意味で教師養成、教師研修がこれまで以上に重要となる。言語アプローチが示すメソッドに従うのではなく、自分、学習者の置かれた環境を考えて、よい教育をデザインできる教師、すなわち自分で考えられる教師が必要となるのである。教師が生み出す最適な学習環境とは、

- ・ いろいろな背景を持った多様な人間が自由に研究・学習できる場
- ・ 多様な考え、情報、モノに触れる
- ・ 多様な人間とつながれる場
- ・ 多様な文化・社会とつながれる場
- ・ いい質問をし、その答をとことん考え抜ける場

であり、そこで、

- ・ 変化を生み出す

- ・新しいつながりを作る
- ・新しいものを創出する
- ・美しいものを創造する

これらの能力を身に付けた学習者を作ることが SNA の究極的目的である。1つの正しい方法を持たない SNA ではよい実践例を記録し、それを広く共有し、それぞれの環境で何ができるかをお互いに考えていくことが重要となる。SNA のベストプラクティスを集めていくことが、SNA の発展につながると言ってもよい。

當作氏による「目標を達成できるなら何をしてもいい」という宣言は、ある意味かなり開き直った態度のような印象を生み出し、研究者／実践者の間に否定的な反応が生じる可能性もありそうだが、本稿の筆者は強い共感を覚える。なぜなら、拙著『日本語教師のためのアクティブ・ラーニング』（横溝・山田 2019）において、本稿の筆者自身が、アクティブ・ラーニングを「脳が活発に働くことで生まれる、あらゆる学習の総称」と定義した上で、学習者の頭の中にアクティブ・ラーニングを生じさせる具体的方法を数多く提案しているからである。

3. おわりに

本研究を始める前は「(SNA は) 21 世紀の社会が要求する人間を言語教育を通して育成する新しい言語教育のアプローチである (當作 2017:5)」という文言が、高い理想を掲げるスローガンのように思っていたのであるが、本稿を執筆する過程で、そのスローガンの持つ意味が見えてきたように思える。本稿の筆者は、SNA の成立過程を、以下のように捉えている。

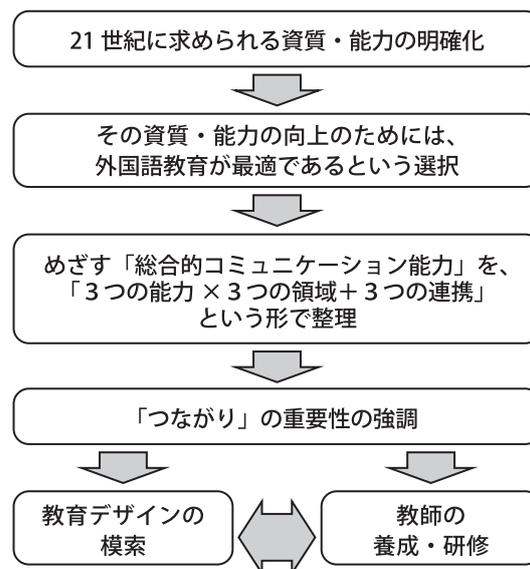


図3 SNA の成立過程

この一連の流れを見ると、SNA がバックワード・デザインによって丁寧に設計されていることがわかる。「SNA のベストプラクティスを集めていくことが、SNA の発展につながると言ってもよい (當作 2017:13)」との文言が示している通り、SNA のアプローチとしての枠組みができあがった今後は、数多くの実践が積み重ねられ、具体的実施方法の紹介だけでなく、実施によって見えてきた成果と課題についての情報が広く共有されることによって、SNA はさらに発展していくであろう。「外国語教育によって人間形成をめざす」という SNA に、本稿の筆者も今後、実践者としてチャレンジしていこうと考えている。

【謝辞】

本研究は、本研究は JSPS (日本学術振興会) 科研費 19K00870 の助成を受けたものです。

参考文献

- 国際文化フォーラム (2012) 『外国語学習のめやすー高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』(當作靖彦・中野佳代子監修) 国際文化フォーラム
- 小林ミナ (2019) 『日本語教育 よくわかる教授法ー「コース・デザイン」から「外国語教授法の史的変遷」まで』アルク
- 田中博之 (2016) 『アクティブ・ラーニング実践の手引きー各教科で取り組む「主体的・対話的な学び」ー』教育開発研

研究所

- 當作靖彦 (2013) 『NIPPON3.0 の処方箋』 講談社
- 當作靖彦 (2017) 「グローバル時代の『つながる』言語教育—ソーシャルネットワーキングアプローチ:理論と実践」 『ソーシャルネットワーキングアプローチと日本語教育研究発表会報告論集』 平成 27 年度～ 29 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号 15K02662, 研究代表者=清水秀子), 5-16.
- 中嶋洋一 (2011) 「ずっと覚えておいてほしいこと」 柳瀬陽介・組田幸一郎・奥住桂編 『成長する英語教師をめざして—新人教師・学生時代に読んでおきたい教師の語り』 ひつじ書房, 226-241.
- 前田康裕 (2017) 『マンガで知る教師の学び 2 アクティブ・ラーニングとは何か』 さくら社
- 三浦孝 (2014) 『英語授業への人間形成的アプローチ—結び育てるコミュニケーションを教室に』 研究社
- 村上吉文 (2018) 『もう学校も先生もいない? SNS で外国語をマスターする《冒険家メソッド》』 ココ出版
- 山崎直樹 (2019) 『『外国語学習のめやす』—背景, 理念, 目標, 方法論—』 田原憲和編著 『他者とつながる外国語学習をめざして—『外国語学習のめやす』の導入と活用』 三修社, 6-35.
- 横溝紳一郎・山田智久 (2019) 『日本語教師のためのアクティブ・ラーニング』 くろしお出版

Social Networking Approach in Foreign Language Education

Shinichiro Yokomizo *

< Abstract >

No matter what the target language is, foreign language teachers need to be able to answer the question of “What is the goal of your teaching?” This study explored and examined the Social Networking Approach (SNA) proposed by Dr. Yasu-hiko Tohsaku, which claims that the final goal of foreign language education is transformation (*Ningen-keisei*).

As a result, it became clear that (1) SNA aims to acquire key competencies needed for the 21st century, (2) SNA gives its first priority to connection (*tsunagari*), (3) SNA is NOT a teaching method, therefore its practices should be developed by teachers at their own teaching environment, and (4) SNA has been established by backward design. SNA is expected to develop further by the accumulation of practices within its theory and by sharing the information of achievements and possible concerns.

Keywords: key competencies, connection, backward design

* Department of English, Faculty of Humanities, Seinan Jo Gakuin University